事であります。我々は

人間に従ふよりも先づ天主に

従はねばなりません。人間は如何なる權利の持主でも、其れは畢竟、悉く天主から援かつて居るのでありますから、其の天主樣に背く事、或は其の禁じられてゐる事を强制するが如きは絶體に許されない處であります。從つて、さうした不法を强ひられた場合、信者たるもの、假令生命を棄てゝも是に從ふことが出來ません。昔の致命人の多くは皆斯うした場合に遭遇て生命を棄てた人々であります。で、此の特別な場合を除くならば、信者は主權者を目して天主の代理者と信じて居りますから、彼等は外の人民よりも、常に、より忠實なるもの、從順なるものであるのが普通であります。

世間には、國家と天主公敎會と云ふ此の二つの集りが、何か互に相入れぬものであるかのやうに考へてゐる人がありますが、之又、大きな誤りであると申さねばなりません。國家と天主公敎會、此の二つの集りのよく一致し得る有樣は、丁度、光と熱の關係のやうな

ものであります。即ち

國の政府と天主公敎會

とは各々其の目的を異にすると云ふ、前者の目的は人の物質上に關する事であり、後者は其の精神上の事を掌るのであります。法律を定めて社會の秩序を保ち、租稅をとり、國防に關することなどは皆國の政府の仕事でありますが、併し天主公敎會の目的とする處は之と違つて、たゞ天主樣に對する拜禮、奉仕、又、人の靈魂の救かりの事ばかりを掌るのであります。主權者は人の體を治め、天主公敎會は其の靈魂を治めるのであります。國家は人民の間に平和を保ち其の繁榮を計り、各々の財產を保護したりするのであります。併し天主公敎會と云ふのは一つの團體ではありますが、之は專ら靈的の團體、此世に於ける天主の御國であつて、我々信者は其が忠實な臣民でなければなりません。

處で斯う申すと何だか信者のみ天主の臣民であつて、他の者は天主と全く關係のない、其の臣民ではないと云ふやうに聞こえるかも知れませんが、決して左樣ではありません。

天も地も往くとして天主の御國でない處はなく、凡ての人は天主によつて生れ且つ死するのでありますから、人は誰しも皆天主の臣民なのであります。例へば一つの國、之は國王のものであつて其の國の人々は凡て其の國王の臣民であります。併し乍ら國王は又特別に御自分の個人的な所有地、財産と云ふやうなものを持つて居られるのを常とします。即ち之を國王は御自分の家族――皇子への遺産として殘されるのでありますが、これと同じ意味に於て、天主公教會と云ふものは、天主の特別なる所有地の如きものであると申すことが出來ます。何故なれば、我々信者は、天主の家族、子供の如きものとして、其の遺産なる天國を讓り受ける筈でありますから。この天國の遺産を蔵くといふ事は、天主様の格別の御惠でありますが、同時に又、信者の勵んだ善業に對する褒美であると申さねばなりません。

凡ての被造物は
天主から定められた通りの道

を其の儘歩むのですが、併し人間だけは意志と自由との此の二つのものを具へてゐるので其の常道、善と天主を選ぶことも出來れば、又、之に反して惡と惡魔に從ふことも出來るのであります。信者は眞の宗教の中に、善と天主とを選んだので、天主様は之を喜し給ふて、其の御國と其の家族の中に入ることをお許しになり、又、天の遺産なる天國をお讓りになるのであります。即ち天主公教會は、眞の宗教に從ふ人々の團體であつて、最初の人間、我々の元祖が創造された時から始まつてゐるのであります。この教會は、何時の時代に於ても、聖と眞、天主によつて定められたものとして、常に人々を救靈の道に導いてきたのでありました。尤も舊約時代は未だ不完全なもので、新約時代、即ち聖寵の宗教――天主公教會の準備（象徴）に過ぎなかつたと云ふ事に就いては、諸君もよく御存知の處であると思ひます。

さて、天主公教會は

創　立　者

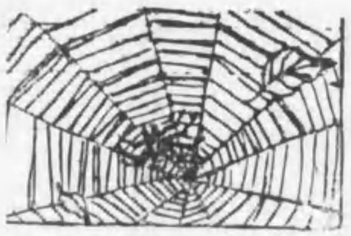
として天主様をもつて居りますから、眞の宗教であります。――完全なもの、清きもの、人間を直接天主に導くことのできる聖寵と、救靈の手段を溢るゝばかり持つて居るのであります。此の天主公教會を造らんが爲に天主は自ら此世にお降りになりました。其の神たる大いなる稜威を卑しい肉體の下に押包んでお出で下すつたのであります。貧窮、謙遜、勞働の中に三十三年間の生活をなし、遂に人々の罪を贖ふ爲に彼の十字架上の悲慘な死をお遂げになつたのでありました。そして耶蘇基督は其の御受難に由て、限りのない功德を御積みになつたのであります。卽ち其の功力からでる諸々の寶、之を主は天主公教會に預けになつたのでありました。斯くて天主公教會は、御主耶蘇基督の御血潮の價によつて儲けられた處の遺産であると云ふ事が出來るのであります。

諸君、基督救世の御事業は、たゞ人類が罪の爲に陷つた亡びの狀態の回復であつたばかりでなく、全く新に建直されたのであります。そして其の建物は破壞の前よりも、もつと堅固な美しいものとなつたのでありました。諸君、この、耶蘇基督が新らしく建て給うた

建物は何か？　それは卽ち聖寵の宗教、天主公教會であります。この教會の中に於てのみ我々は靈魂の救かり、その適當なる手段を受けることが出來るのであります。

天主公教會は天國に通ずる廊下

のやうなものであつて、其の天國の永遠なる幸福は、たゞ忠實なる信者にのみ、歸すべき遺産であります。



第四十　カトリック教會（二）

人が親から生れると其の家族の一員となり、ある國に生れる時、彼は其の國の一國民となるのでありますが、併しこゝに

天主公教會のものになる

と云ふのは之と大いに其の趣を異にしてゐるのであります。天主公教會は申すまでもなく靈的の國、たゞ靈魂と、その救かりの事のみに關係して、人の生れる事とか、又、其の肉身上の事、國籍などに就いては一切關係しないのであります。天主公教會とは眞の神なる耶蘇基督を家父とする一家庭のやうなものであります。卽ち信者は其の子供で有りますが併し、この信者が天主の子供になつたと云ふ仔細は、天主公教會と云ふ家庭に生れたからではなく、實は養子として其處に入籍したやうなものであります。

ある家庭が他から養子を貰ひ受けると云ふ場合には、其の間に一定の契約が取交されねばなりません。天主と人間との場合、卽ち天主が人間を其の子供としてお認めになり、人間は恰も子供の父に對するが如く、天主樣に從ふやうになると云ふ、此の關係を成就させるのにも、矢張り一つの契約――洗禮の祕蹟に因て行はれるのであります。洗禮は人間の生れ乍らにして持つてゐる原罪の汚れを淨め、靈魂に成聖の聖寵をつけるのであります。成聖の聖寵、之によつて人間の靈魂が如何程美しくなることか、それは天主樣のお氣に入るものとせられ、又、靈魂の救かりに必要な業を行ふ恩惠を豐富に受くるやうになるのであります。

次に洗禮によつて我々は靈魂に天主樣の印を戴くのだと云ふ事を忘れてはなりません。この洗禮によつて天主樣は、（丁度人が

自分の所有物に印をつける

やうに）その靈魂に確と印をお附けになるのであります。皇帝の御家族には格別の紋章が

定められて居るやうに、（又は子供が其の親に何處か似ることに由て、其の親の實の子供であると云ふ事が分るやうに）洗禮によつて信者は天主の一家族たるの印を與へられるのであります。ですから假令充分教義を研究し、屢々聖堂に參詣致しましても、その人が洗禮を受けない以上は、たゞ志願者と云ふにとゞまつて、信者と云ふ事が出來ません。言ひ換へれば、天主の養子と爲す處の契約が、まだ行はれて居りませんから、其の人は、たゞ天主公教會の入口に立つてゐるばかりで、まだ其の家族の中に加へられて居らないのであります。世間には時々、長い間教義を研究しながら、尙洗禮を授かることを我儘をもつて拒絶する人を見受けますが、若し其の儘死にでもしたならば、天主様の子供が受くる處の遺産を失ふ危險があります。又、信者の子供であつても、洗禮を受けない以上は、矢張り此の末信者の仲間なのであります。若し彼が其の儘死ぬならば、天國の幸福を受けることが出來ません。從つて信者たる親は其の子供の生れた時、之を早く天主公教會の中に入れて、信者に成ると云ふ大きな幸福を、洗禮に依て受けさせるやうにせねばなりません。

さて、此の洗禮に依て受けた印は、どんな事が有つても永久に消えないのであります。惡事を働いても、又、假令偶像教に歸つたとしても、彼から信者の名を取去ることが出來ません。罪は、この印の美しさを汚しますが、併し其れは丁度、放蕩息子が

不肖の子

として、其の親の名譽を大いに傷つけはしても、其の子たる事實を消すことが出來ないやうに、どんなに墮落しても、洗禮に因て受けた印は、是を全く消し去ることが出來ないのであります。

洗禮は人を信者とする——卽ち之に因て人は其の靈魂の汚れを淨められ、成聖の聖寵を戴くと云ふ、天主は彼を御自分の子供となし、又その遺産なる天國の幸福を與ふべく思召されるのであります。併し信者は、往々にして大罪を犯すことに因り、成聖の聖寵を全く失ひ、この有難い天主の思召しを無にする事が有るのです。卽ち成聖の聖寵を失ふと同時に靈魂は天主の遺産を載くと云ふ權利をも失つてしまつて、彼若し其の儘死するならば、

永遠の地獄に陥らざるを得ないのであります。併し斯うなつても彼は矢張り信者であり、其の靈魂には洗禮の印が、何時迄も殘りますから、天主公敎會は彼を自分のものでないと云つて之を棄てゝしまふ事が出來ないのであります。

×

靈魂と肉體、この二つのものが一緒になつて人間と云ふものを形造つて居ります。そして其の肉體は目に見ることができますが、併し靈魂は之を見ることが出來ません。天主公敎會も常に、この目に見える體とも云ふべきものと、又、目に見えない靈魂にも比すべき或ものからなつてゐるのであります。卽ち前者は、凡て洗禮を受けた者の團體――新しいもの、古いもの、小さいもの、大きいもの、善人、惡人などの區別なく、一切の信者を含んだ團體を指すのであります。たゞ洗禮を受けたと云ふ、其れだけの理由によつて、人は此の團體の一員たり得るのであります。そして或家族の中の人々を一人々々數へることが出來るやうに、我々は此の團體に屬する人々を數へることができます。處で後者、天主公

敎會の靈魂とも云ふべきものは何で有るかと云ふに、其れは善人の團體、卽ち現に聖成の聖寵を有する者の集り、天主樣の子供の團體なのであります。成程或者が洗禮を受けたと云ふ事は分つて居りましても、其の者が果して成聖の聖寵を有するや否や、それに因て

善人の團體

に屬してゐるか、どうかと云ふことは、迚も推察することが出來ません。聖寵と云ふものは、人の靈魂と同じ樣に、之を目に見ることが出來ないのですけれども、天主樣にあつては凡て分らないと云ふ事がありません。心の底の底まで見透し給ふ天主樣は、誰が善人で天主公敎會の靈魂に屬してゐるかと云ふ事を、ちゃんと御存知なのであります。

人が其の救靈を得る爲には、たゞ天主公敎會の體の一つの部分になると云ふ、卽ち單に洗禮を受けただけでは足りないのであります。洗禮を受けた信者の中にも、殘念ながら罪人の有る事實は否めません。この罪を犯した信者、其の者の靈魂が、一つの大罪によつてでも汚されてゐる間は、天國の遺産を貰ふ權利がないのであります。若し其の儘死ねば、

惡魔のやうに地獄の苦罰を受けなければなりません。斯う云ふ罪人も矢張り天主公教會の體の一つの部分ではありますが、併し其れは丁度、一つの生きた體の中にも、盲目になつた目があり、つんぼになつた耳があり、或は腐つた肉片があるのと同樣であります。信者だと云つた處が、其れは丁度、牢屋に入れられて死刑の執行を待つばかりの罪人が、一つの立派な帝國の人民に屬してゐると威張つても何の役にも立つものではなく、又、放蕩に身を持ちくづして家を追はれた貴族の息子が、尙其の家の名を名乘つてはゐても、最早それに何の價値もないやうなものであります。

人が其の救靈を得る爲に、天主公教會の此の靈魂に屬する事が是非必要でせうか。然り然り、凡ての人にとつて之は大いに必要とする處であります。諸君もよく御存知の樣に、天國の中に入るべき筈のものは、ひとり天主樣の子供ばかりであります。處が我々がこの天主樣の子供となる爲に――天主樣の子供となる事を永續する爲には、どうしても成聖の聖寵に依らなければなりません。卽ちこの成聖の聖寵を受けることに因て、我々は天主公

教會の靈魂に屬するのでありますから、之に屬しない時、我々は救靈を得ることが出來ないと云ふ事になるのであります。

次に、人は天主公教會の體の部分にではなく、たゞ其の靈魂にのみ屬することが出來るか、どうか、言葉を換へて言へば

洗禮を受けずして

人が其の救靈を得るや否やと云へば、それは實際上出來ないことではありません。併し御主耶蘇基督は、萬民を救ふ爲に天主公教會をお立てになり、其の切なる御望みは、殊更人々が洗禮を受くる事に因て、之を天主公教會に入らせ度いと云ふことなのであります。故に若し、何人かゞ洗禮を受くる機會が有るにも拘らず之を斥け、その覺悟をすることを拒むならば、其れは卽ち耶蘇樣の明白な御命令に背くもの、勝手に己が救靈を棄てるものであると申さねばなりません。折角この教義を研究しながら、さういふ樣になつた人が、未信者の中に澤山有るに相違ないのであります。そして又一方には、眞心から天主樣の方

に歸りたい、實際に改心したい、其の靈魂の救かりを得たい、洗禮を受くることによつて天主公教會の中に入り度いものだ、と絶えず望みながらも、止むを得ぬ都合で其れを實行することが出來ず、又、其れに適當な方法を見つけることができない、と斯ういふ人も亦世には澤山有りませう。で、斯うした人の靈魂は一體どうなるか、洗禮を受けなくとも勿論之等の人々の靈魂は完全に救はれるのであります。何故なれば、天主様は何時の世にも

眞心を持つてゐる人々

を決して斥け給ふことがないからです。

諸君は望みの洗禮、或は血の洗禮と云ふことに就いてお聞きになつたことが有ると思ひます。即ち望みの洗禮と云ふのは、天主様を深く〳〵愛して、犯した罪を完全に痛悔し、熱い希望を以て洗禮を受けたいと云ふ決心を有つてゐるが、之を受ける機會が無いまゝに死んだ場合、彼は望みの洗禮を受けたのであります。又、血の洗禮と云ふのは、洗禮を受けて居らないものが、その信仰の故に、或は天主の御掟を堅く守らんが爲に、その生命を

投げ棄てた場合、彼は血の洗禮を受けたのであります。で、此の二つの場合に於ても、天主様は其の人の善い心に報ひる爲に、その者の原罪、自罪をお赦しになり、成聖の聖寵をお與へになるのであります。即ち其の時から其の人は天國の遺産を受くる權利を有するやうになり、天主公教會の靈魂に屬して、その靈魂の形造つてゐる所謂る善人の團體に加へられることになるのであります。併し乍ら、望みの洗禮の場合、萬一其の病氣が全快した節には、彼は正式の洗禮を未だ受けてゐないのですから、其の後機會の有る時、早く正式の洗禮を受けねばならんといふ義務が殘るのであります。

クレド

第四十一　諸聖人の通功（一）

我々カトリック信者は、世界に大きな一つの團體を作つてゐるのであります。其の國とか、又、其の人種の如何などには一切係りなく、たゞ我々は、耶蘇基督を頭とする天主公教會に屬すると云ふ、此の一事に因て、天主様の御國とも云ふべき其の大家族の一員たり得るのであります。普通、我々の家族の中には、大きなもの、小さなもの、健康なもの、強いもの、弱いもの、或は智慧の優れたもの、然らざるものなどが寄り集り、各々は同じ血に繋り、又、同じ苗字を持ち、同じ屋根の下に起臥することに因て、渾然たる一家庭を形造つて居るのであります。そして彼等は皆其の家の財産とか名譽などのお蔭に依て、社會的にも亦一廉の地位を保つて幸福に生活して居ります。即ち家長たる者は、其の家族の頭として常に之を治め、又その名譽、財産などを保護し、管理し、家族各自の年齢、性質

により、必要に應じて其れを分け與へてゐるのであります。ですから、家の名譽とか財産は、家族一人だけのものではなく、家族全體の者が、之を共有してゐることになるのであります。――我々

カトリック信者

も此の通りであります。即ち洗禮の印を持つ事に因て、此の天主公教會と云ふ大きな家の屋根の下に生活することが出來、同じ掟を守り、同じ祈禱を誦へ、同じ祭式に與り、又、同じ目的、天の御父の遺産たる天國に達する爲に努めてゐるのであります。そして、その家族の中には、司教あり、司祭あり、古い信者、新しい信者、熱心なもの、不熱心なもの金持、貧乏人と云つたやうに種々なものが有るのですが、之等は皆、耶蘇基督を頭とする大家族の一員として、其の家の財産、名譽などを共有してゐるのであります。

處で、此の天主公教會の財産とは如何なものかと申しますと、其れは諸君も御存知のやうに、彼の耶蘇基督の御受難の功德から出る處の限りない寶、之が土臺となり、其の上に

聖母マリアの功績、古今の諸聖人の功績等が集つて形作られたものであります。七つの祕蹟、贖宥、善業、其の他の公教的の行爲は、丁度此の寶倉に通ずる溝の如きものとなり、哀憐深い天主様は、この溝を通して、我々信者に其の寶をお與へ下さるのであります。

天主公教會の見えざる頭にて在す耶蘇基督は、其の財産を管理し、之を信者の種々の必要に應じて分け與へ給ふのであります。即ち我々は

『求めよ、然らば與へられん』

と云ふ實に有難い御言葉を賜はつてゐるのですが、我々は常に善い覺悟をもつて、お願ひするやうに心掛けねばなりません。此の財産は實に膨大なものでありまして、我々人間が何程頂戴したからと云つて盡きることがないと云ふ、眞に其れは無盡藏なのであります。太陽は、昔から不斷に此の地上に多大の光と熱を送つてゐますが、その爲に、熱や光が減じたとは云へません。是と同樣に、此の天主公教會の有する寶を、我々信者が望み放題に汲み取つたからと云つて決して無くなるものではないのであります。

ある模範的家庭と云ふものを見ますと、其の中の各自は、たゞ現在所有してゐる處の財産を樂しむだけでは滿足せず、彼等は之を保護すると同時にもつと增殖さうと努めるものであります。共同一致、彼等は助けあひ、勵ましあつて働きます。若し誰か一人が病氣にでもなると、他の者が之に代つて働き、又、十分世話をして、早く其の病氣を癒させやうと致します。何故かと云へば即ち此の

一人の禍ひは家族全體の不幸

であり、又、一人の健康は即ち家族全體の健康、幸福となるからに外なりません。天主公教會内に於ても全く此の通りであります。天主公教會の所謂る財産に與り、關係してゐる信者一同は、各々の善業、祈禱などに由て、之を守り、殖すやうに努めねばなりません。

×

我々カトリック信者は、皆お互ひに兄弟の樣なものでありますから、夫々必要な場合には、よく援けあはねばなりません。即ち我々は、まづ、其の兄弟の爲に凡ての賜物の賜り

主である處の天主様に向つてお祈りをするのであります。絶えず天に在す御父に對して、お互ひの爲に、その御援助と御憐憫を願ひ求めて止まぬのであります。何と云つても我々の救靈に最も必要なものは、天主様の御冥助と其の聖寵でありまして、之がなければ迚も救かりに關する考へ、望みさへ起すことが出來ません。ですから我が天主公敎會に於きましても、日々凡ての信者の名に依り、その信者等の爲に、ミサ聖祭を捧げてゐるのであります。又、司祭は殊に長い祈禱によつて、國の主權者の爲、一般人民の爲、信者の爲、又病人や憂ひ悲しむ人の爲には勿論、一切の罪人惡人の爲にも、よく天主の御恩惠を求めるやうに命じてゐるのであります。畢竟、天主公敎會と云ふ家族の一人々々の爲に、司祭は毎日熱心に祈つてゐるのであります。國の中に天災が起るとか、戰爭、饑饉、傳染病などの有る時には、格別に、信者に對して共々祈ることを奬め、天主様の御怒を宥め、人民が種々の苦痛から早く逃れるやうに願ひ求めるのであります。

さて諸君は、我々が再々誦へる處の、彼の主禱文の中に「天に在す我等の父よ」と云つて、私の、と云ふ第一人稱が用ひてない點にお氣附きであらうと思ひます。之は何の爲かと云ふと、各々の信者は、天主様に向つて、たゞ自己の爲ばかりではなく、他人の爲にも同様に祈らねばならない、と云ふことを示されたものに外なりません。天主公敎會の定めてゐる公の祈禱は皆此の例に倣つて居ります。それですから自分が他の信者の爲に祈ると同様に

外の信者は又自分の爲に祈つて吳れる

のであります。即ち我々が何か仕事でもしてゐる時とか寢てゐる場合にでも、天主公敎會なり、他の多くの兄弟なる信者が、自分の爲に天主様に祈つてゐて吳れるのだと云ふ事を思ふ時、我々は安らかな有難い氣持に滿たされざるを得ません。

勿論信者は、まづ何より自分自身の救靈の爲に力を盡さねばならぬと云ふ、即ち我々が信者となり、日々善業を行ひ、祈禱をしてゐる目的は、全く是が爲に外ならぬのであります。が併し、我々カトリック信者は、自分の救靈を計ると同時に又他の信者の救靈の爲に

も盡さねばならぬと云ふ義務を持つてゐるのであります。「自己の如く他人を愛せよ」と云ふ御掟の精神に基いた此の立派な行爲こそ、誠に我が眞の宗教の特別なる印であると云はねばなりません。何故ならば、斯ういふ美しい愛德の行はれるのを、他の宗教、特に偶像教の中に之を見出すことが出來ぬからであります。概して偶像教に於ては、高遠な靈魂上の問題に關するよりも、寧ろ

卑近な此世の賜物を

求める事にのみ齷齪してゐるやうであります。金とか名譽、地位、權勢、或は肉體の健康などを得ることが、人生に於ける最高の目的であるかのやうに考へる處からして、彼等は之を求めるのに全く手段を擇びません。不正をなす者、迷信に流れる者、彼等はたゞ〳〵自分の利己心の滿足ばかりを求めて、他人の事などは考へてみやうともしないのであります。彼等の心は、人を欺き、人を害ひ、其の間に不和と滅亡の種子を蒔かうとする惡魔の住所となつてゐるのですから、此の愛德などの見付かりやう筈のないのは、當然の事であ

ると云はねばなりません。

×

前置が大變長くなりました。愈々「諸聖人の通功」とは如何な事かと云ふ問題に觸れながら御話を進めようと思ひます。――諸君は、我々カトリック信者が、現在三箇所の異なつた場所に分在してゐると云ふ事を御存知でせう。即ち天主の尊前に在つて、永遠を樂しむでゐる人々を指して、勝利の教會に屬するものと云ひ、罪の汚れを潔め、其の償ひを果す爲に、現在煉獄に留まつてゐるものを

忍苦の教會

に屬するものと云ひ、而して我等現世に幾多の困苦と戰ひながら、天國の福樂を目指して進んでゐる者を、戰鬪の教會に屬するものと誦へるのであります。無論此の三つの教會は名こそ違へ、同一の主を頭とする同じ教會であることは言を待ちません。畢竟この天國に居る聖人と、煉獄に苦しむ靈魂と、そして現世に生きてゐる我々一切の信者が、お互ひに

其の功績を通じ合ふことを稱して、諸聖人の通功と申すのであります。卽ち我々現世に居る信者は、其の善業なり祈禱を以て、煉獄の靈魂の苦痛を輕減し、早々之を天國に昇らせるやうに努めると云ふ、言はゞ此の煉獄の靈魂は、我々の家庭に於ける病人の如きものでありますから、我々は格別に之が爲に盡さねばならぬのであります。又、聖會も此の靈魂を救ふ爲に種々な方法を行つて居ります。司祭の捧げるミサ聖祭、或は他の如何なる祈禱に於ても、必ず此の煉獄の靈魂の爲に祈念することを忘れてはをりません、年に一度は日を定めて、世界中の司祭が、この煉獄の靈魂の爲に、特に御彌撒を、一日に三度たてるのであります。我々は自分の死んだ家族の爲に祈るのは勿論でありますが、ひろく

一般の死人の爲にも祈る

ことを忘れてはなりません。卽ち聖會は、朝夕の祈禱文、及び食後の祈禱の中に之を加へて、我々をして凡ての死人の靈魂の爲に祈るやうに奬めてゐるのであります。――さて、それならば我々は、天國に居る聖人達に對して如何すべきかと云ふと、我々は煉獄の靈魂

に對するが如くに爲す必要はなく、却つて之を尊び、之に祈つて其の援助を蒙るやうにせねばなりません。何故なれば、彼等は天國に行つても依然我々の兄弟であり、今は天主樣の側近く侍つて、我々の爲に執成しを爲し、我々の救靈に必要な恩惠を與へて戴くやうに願ひ求めて下さるのであります。以上が卽ち諸聖人の通功と申すのでありまして、我々現世の信者は、此の事を忘れず、よく煉獄の靈魂の救かりの爲に盡すと同時に、又

天國の聖人達に祈つて

天主樣の御惠みを求めて戴くやうに願はねばなりません。

第四十二　諸聖人の通功（二）

我々の救靈に祈禱の必要なるは申す迄もないことでありますが、これにも増して善業を行ふことが、又、甚だ大切であると云ふ事を忘れてはなりません。何故なれば、祈禱の目的は往々にして、我々に善業を行はさしめ、その功績に因て、天國の榮光を嗣がしむるの手段たる場合が多いからであります。即ち我々が大主の十誡を能く守り、他人には愛德を盡し、敵を赦すばかりでなく却つて之を愛し、又、眞の神を知らぬ人々に之を傳へるなどの善業を行ふことは、即ち、たゞ己の救靈を全うするばかりではなく、その功績の如何に依ては、天國の福樂の最も高い位をさへ獲得する事が出來るのだと云ふ事を考へねばなりません。申す迄もなく、此の善業、その功績と云ふものは、何處までも其の人自身のものであつて、他人に之を讓つたり、其の人に代つて他の者が其の報酬を受けたりすることは

出來ませんが、併し左に擧げます例のやうに、諸聖人の通功と云ふことが、矢張り此の間に行はれるのであります。――即ち、或家に澤山の兄弟がありまして、その中の最も利巧な一人が、立身出世して、國の高官に上り、皇帝から非常に信用され、重く用ひられてゐると致しませう。この場合、此の人の受けてゐる位とか名譽、權勢は、無論此の人自身のものでありますが、併し兄弟なり、その一族も、充分に其の御蔭を蒙ることが出來るのであります。所謂る世間にも肩身が廣いと云ふわけであり、又、若し何か皇帝に恩惠を願ひ度い時には、此の兄弟を通じて其れを求めれば、皇帝は必ず其の望みを聞きとゞけて下さるに相違ありません。是と同樣に我々も善業を勵み、德を積んで、天主樣の尊前にお氣に入る者と成れば、自然天主樣は我々の

靈的兄弟たる外の信者

に對しても、好意を持たれるやうになるに相違ないのであります。即ち我々の行ふ處の善業は、己が身の爲ばかりではなく、延いては他の多くの人に迄及ぶものであると云はねば

なりません。

けれども諸君は、我々の行ふ善業の如何に些少なものであるかと云ふ事を、よく御存知でありませう。即ち有るか無いか分らぬやうな我々の善業、天主様は斯様に僅少なものを御注意下さるのであらうか、と云ふ疑問を起さざるを得ぬのでありますが、併し幸ひにも天主様は、我々の善業――それが如何に僅少な價値のないものであつても、其れを行つた處の我々の善意を嘉して、之を承け容れ給ふのであります。それに、天主公教會と云ふ大きな團體を通して見ますと、その中の各人の行ふ善業を集めたならば、その功績も仲々大きなものに成るに相違ありません。又、我が天主公教會には、特に德の勝れた人、所謂る聖人とも稱すべき信者が、何時の時代にも澤山御座います。此の人達は、自分の爲には餘り償ひをする必要がないにも拘らず、而もその一生涯を、祈禱や苦業に身を捧げて、我々の爲に只管天主様の御憐憫を願ひ求めてゐて下さるのであります。即ち我々の爲す償ひは誠に取るにも足らぬ僅少なものであつても、之等聖人達の大きな償ひを合はせて天主様の

尊前に捧げる時、天主様は喜んで之を御受納下さるのであります。我々の様に心の冷やかな、天主様の爲に何のなす處もない者達を愛して、其の救靈を全うさせ、又、罪人に當然下さるべき罰を輕減し、その時期を延し、彼等を一人でも多く改心させやうと御取計らひ下さるのは、（凡て天主様の其の御憐深い御心から出るのではありますが、）尙矢張り此の聖人達の善業も亦大いに與つて力あるのであります。

舊約聖書に誌されてある處の彼の

ソドマとゴモラの町

も、天主様は若し此の町に十人の義人が居つたならば、此の町に下された處の刑罰を御赦しになつたのでありました。即ち我が天主公教會に屬する信者は、靈的兄弟である處の多くの義人や聖人達の御蔭に依て、知らず〳〵の間に、天主様の大いなる御哀憐を蒙つてゐると云ふ、所謂る「諸聖人の通功」に與つてゐるわけなのであります。

さて、此の諸聖人の通功に關係する爲には、即ち其の御蔭を蒙る爲には、どうしても信

者と成つて、天主公教會に屬して居らねばなりません。而も名だけではなく、心から之に屬して居らねばならぬと云ふ、卽ち洗禮を受けて信者となつたばかりではなく、其の上、成聖の聖寵を持つて居らねばならぬのであります。大罪に汚されることなく、天主樣の御寵愛を豐に受ける資格の有るものでなければなりません。丁度、子供が自分の家の財產に關係する爲には、善い子供として、父の愛を受けて居らねばならぬのと同じであります。ですから信者と雖も、大罪の汚れを持つてゐる間は、此の諸聖人の通功を完全に受ける事が出來ません。何故なれば、丁度、死んだ體に着物や食物が不必要である如くに、大罪の結果として、死んでしまつたも同然の靈魂にも、矢張り之を養ふ食物、之を溫める處の着物が不必要であると云ふ、卽ち天主公教會は、死んだ子供に對して、最早其の財產を分つことをしないのであります。ですから諸君も御存知のやうに、大罪を持つてゐる信者は、告解以外の祕蹟を受ける事が出來ません。又、贖宥を蒙ることも出來ないのであります。何故なれば、永遠の刑罰を受くべきものとなつてゐる靈魂です。何んで一時の罰の償ひを

受けることが出來ませう。……天主公教會の祈禱も、種々の善業の功績も、此の哀れな靈魂の爲には全く役立ちません。たゞ天主樣の御憐憫が早々下り、永遠の罰から免れさせ爲に、その靈魂に痛悔の心を起させ、よい告解をなすの恩惠の與へられん事を祈るばかりであります。併し此の大罪が赦されたならば、その靈魂は聖寵を再び得、又天主の寵愛を受くる身となり、同時に諸聖人の通功にも與り得るやうになるのであります。

×

若し世界中の天主公教會を合せて一つの大きな家族と見立てるならば、各國の教會は、其の分家の樣なものであります。この分家は又分れ〳〵て、澤山の小さな我々の教會となるのでありますが、此の同一の教會に屬する信者等は、特に親密な間柄の兄弟であると云はねばなりません。彼等は毎日

一つ御堂

に集つて共に祈り、同じ御彌撒に與り、同じ手摺に連つて一緒に聖體を拜領し、己が靈魂

の指導者である處の同じ靈父に從つてゐるのであります。例へば同じ父、同じ母から生れて、一つ屋根の下に生活す肉身上の兄弟にも比べ得るものでありまして、其の行ふ善業や祈禱は、お互に非常に深い關係を有つてゐるのであります。誰かゞ大罪にでも陥ることがあれば、他の者は卽ち此の靈的兄弟の爲に心から心配して、先づ能く祈ると共に、よい奬めをして、早々改心させるやうに努めねばなりません。教會内に悪い者が一人でも出來ると云ふ事は、卽ち信者各自の不名譽となるのでありますから、信者一同は心を協せて、左樣なことのないやうに注意し合はねばならぬのであります。若し信者同志の間に不和が起つたやうな場合には、他の者が極力これを調停やうに盡さねばなりません。貧窮に陥つて困る者があれば之を救助し、災難に罹る者があれば之を見舞ひ、又、病む人が有れば之を心から慰めるなど、相互に

愛德の限り

を盡しあはねばならぬのであります。耶蘇樣も「汝等此の最小さき兄弟になしたる處は、

事毎に卽ち我に爲したるなり」と仰せられました。誰彼の差別なく、我々は事毎に親切を盡すやうに心掛けねばなりません。

信者間に喧嘩、口論と云ふ目立つた爭ひはなくとも、どうかすると窃に嫉むとか、恨みあふやうな事が有りますが、是は大いに氣を付けねばならぬことであります。耶蘇樣は凡ての人を愛して居られますから、若し或兄弟を恨んだり、誹謗つたりすれば、卽ち其れは主の愛し給ふ處の者を憎むと云ふことになるのであります。そんな事で、どうして自分は耶蘇樣を愛してゐるなどゝ云ふことが出來ませうや。併し其の人は尙斯う云つて辯明するかもしれません。卽ち、彼は自分に斯ういふ害を加へた、と。噫、言ふことを止めよ！其の人自身、果して完全な人でありませうか。耶蘇樣は、其の

敵を愛せよ

と仰せられて居ります。聖主は彼の十字架上に、その敵をお赦しにはならなかつたでせうか？……

さて又、一家の者が等しく其の家の繁榮を計るやうに、信者等も大いに其の

教會の隆盛

を計らねばなりません。信者の數が益々殖るやうに、即ち未信者を出來る丈け多く導くやうに皆が努めねばならぬのであります。さうした所謂る傳道を、たゞ司祭や傳敎士に任せておかずに、諸君が先になつて働くやうにして戴かねばなりません。それに固い信仰の所持者や耶蘇樣に對する深い愛熱に燃えてゐる人は、自然にさうした方面に心が動くのであります。未だ本當の宗敎を知らぬ不幸な人に、どうかして此の有難い敎を傳へたいものだと、もう一生懸命になるのであります。諸君、耶蘇樣は、若し自分の名に依て冷水の一杯でも人に施す者には、大いなる褒美を與へるであらう、と御約束になつて居りますから、我々は

耶蘇樣の御國の擴がるよう

又、耶蘇樣の爲に新しい子供が、一人でも多く出來るやう、又、人の靈魂の救かりを全うさせるやうに努めたならば、どれ程立派な御褒美を頂戴することでありませう。そして又斯うして耶蘇樣の爲に働くのは、畢竟自分自身の靈魂の救かりの爲に最も確な有益な働きをすると云ふことになるのであります。何卒諸君、此の立派な愛の行爲を、益々勵まれるやうにお願ひ致します。

第四十三　肉身の復活（一）

死とは何ぞ、死は人の靈魂が其の肉體を離れる現象を云ふのである。即ち死後の肉體は次第に腐つて亡んで終ふが、靈魂は全きものとして永遠に活き殘る筈であると云ふ、是は既に諸君もよく御存知の處でありませう。我々の肉體は、最初土によつて造られたものでしたから、死後この肉體は又元の土に歸へらねばならぬのであります。骨は碎け、肉は破れ、何年か先には全く其の形を殘さなくなるのでありますが、併し、其れは決して消えて無くなつてしまつたのではありません。我々の目にこそ見えませんが、必ず何處かに土の一成分として存してゐるのであります。そして天主様は、其の何處に存在してゐるか、と云ふことを明らかに御存知でありまして、世の終りには、其れを土臺として我々を甦らせ給ふ筈であります。

耶蘇基督は其の御死去後三日目に蘇り給うた事に因て

我等も死後復活

すべきものであると云ふことを示して下すつたのでありました。即ち世の終りに當つて天主様は其の全能によつて、人祖以來の一切の死者を復活らせ給ふのであります。

尤も天主様は、たゞ一人聖母マリアに對しては全く例外の特典をお與へになりました。成程聖母マリアも一般の人々同様に御死去致されましたが、併し其れは、聊かの汚れもなかつた聖母ゆゑ、罪の罰として死に給うたのではなく、たゞ、我々を救はんが爲に死に給うた御子耶蘇様に似た者となる爲に死に給うたのであります。神たる耶蘇様を宿し給うた聖マリアの其の聖なる御體、天主様は、之が、死後腐敗することをお許しになりませんでした。即ち聖母マリアの靈魂は、ほんの一時だけ其の御體を離れたが、直に又もとの體に合併して、光榮の中に蘇り、其の尊き御體と御靈魂は共に天使達の案内によつて高く天國に昇らせられたのでありました。今や聖母マリアは天地の元后として御子耶蘇様の側に

輝く光榮の中に大いなる勢力を占めておいでになるのであります。この

聖母マリアの被昇天

は玄義に屬する事であつて、天主公教會は之を四大祝日の一つとして記念して居ります。

×

我々の蘇り、それは先にも申した通り、世の終りに行はれるのであります。即ち天主様が此世、又、此世の中にある凡てのものを滅ぼし給ふ時であります。抑々現世は人の爲に造られたものでありましたが、人間は之を以て天主様に背き、罪を犯すに至つたので、此世は人々の其の罪の爲に汚れたものとなつてしまひました。その爲、天主様は何時か此世を滅ぼしてしまはれる筈でありますが、併し其れは全く無くして終ふのではなく、火によつて之を清めて、もつと美しいものとせられる筈なのであります。

それならば、其の日は一體何時來るのでありませうか。之は天主御自身のみ知り給ふ秘密であつて、天使、聖人と雖も知り得ない處であります。併し天主様は必ず其の日の來たるべき事を人々に考へさせる爲に、其の恐しい

壞滅の兆

を種々の方法に由て、お示しになるのであります。即ち國と國との恐しい戰爭、猛烈な傳染病、饑饉、其の他大變地異や、又、世界の人々を惱ます種々な禍など、つら〳〵之を見る時、誰しも世の終りの軈ては來たらざるを得ないと云ふ事を察し得るのであります。で、その世の終りの日に當つては、此の地上に生くる一切の人が一度に死なねばならぬ筈であります。使徒信經に「彼處より生ける人と死せる人を審かん爲に來り給ふ主を信ず」とありますが、此の生ける人と云ふのは、即ち其の大破滅の時に際して一度に死なねばならぬ人々を指したものであり、死せる人と云ふのは、世の始めから自然的に次々に死んできた人々の事を申してゐるのであります。

さて其の日、世の終りに凡ての人々が皆死んでしまつた時、天主様は恐しい音をたてる喇叭を吹く處の天使達をお遣しになる筈でありまして、一度此の天使達が喇叭を吹くと、

ー――其の音は世界の隅々にまで響き渡るのでありますが――一切の死人は丁度眠つてゐた人が目を醒すやうに、容易く墓から蘇へる筈なのであります。即ち天主様は其の全能を以て、各々の人の肉體を新に造り直し給ふと、凡ての靈魂は――聖人の靈魂も惡人の靈魂も――皆此世に歸つて、昔生きてゐた其の儘の體に合併する筈であります。元祖アダムより始つて、一番最後に生れた人に至る一切の人間、大きなもの、小さい者、金持、貧乏人、皇帝、人民、信者、未信者、善人、惡人の區別なく、悉く甦つて其處に集る筈であります。そして此世に生きてゐた時と同じ體、同じ靈魂を具へて蘇へる筈でありますから、見知り越しの者は皆其の時相會ふことができるのであります。併し、その體は同じものでも其の性質は大いに變化する筈であつて、特に天國に行く聖人達と地獄に落される惡人との區別と云つたら大したものに相違ありません。何故ならば、體には靈魂の有様が映る筈だからであります。

第四十四　肉身の復活（二）

我々の體と云ふもの、其れが如何なに美しいものであつても、一度病氣にでも罹るとか或は何かの災難に出會つて片輪に成るかする場合には、誠に見苦いものに變つてしまふのであります。又、さうした出來事がなかつたとしても、歳をとれば自然的に衰つて、皺がよつたり腰が曲つたりして、到底昔の美しかつた面影をみる事が出來なくなつてしまふのであります。併し復活後の善人の體は、其んな缺點とか不完全な處の少しもない立派なものとなる筈であります。最早疾氣に罹ることもなければ、苦痛とか疲勞、暑さ寒さなどを感ずることもなく、又、老衰するなどと云ふ事の絶對に無い――其の肉體は不滅のものとして蘇へるのであります。靈魂と肉體の完全なる合併、それは再び離れることの出來ないもの、死と云ふものが無くなつて、これからは永遠の生命に活きるものとなるのであります

す。

そして又、復活後の體は靈的性質を受けるので、それは目に見えても、最早や重さ――物質的重量と云ふものが全く無くなつてしまひ、丁度、人の思、考のやうに瞬時にしてどんな遠くへでも飛んでゆくことが出來るやうになる筈であります。この世に於けるやうに、邪惡の念を起すと云ふこともなくなり、自然的に、眞、善、美の方に傾き、又、其の五官も引續き種々の樂みを持つ筈ですが、併し此の樂みは全く淸きもの、聖なるものであつて、今迄のやうに、低く、つまらない、少し度を過ごすと身體に害を及ぼすことになるやうなものとは全然相異なつたものとなるのであります。

噫、善人が目映い光榮の中に蘇る日の有樣

その美しさ、その淨らかさは此世の如何なものでも比べることができません。

次に惡人はどうなるか。無論彼等も善人同樣に甦るのでありますが、併し其の不滅なるものと云ふ一點を除くなら、是と彼とは又何と云ふ相違でありませう。その肉體は醜く

臭く、重く、實に見苦きもの、而も永遠の業火に燒かれ燒かれて、えも云はれぬ苦惱を受けねばならぬ筈であります。

斯くて、世の終りに際して、凡ての人々が蘇ると同時に、嘗て耶蘇基督の刑具たり、又、我々人類の救ひの印であつた處の十字架が忽ち目の前に現れる筈であります。すると引續いて御主耶蘇基督が大いなる威勢をもつて、人々を審かんが爲に來たり給ふと云ふ、あゝ其の日の耶蘇樣、それは昔、人々を救はんが爲に來り給うた時の御姿とは打つて變つて、其の光榮は太陽よりも輝かしく、その威力は雷よりも强く大きく、絕體寸分を赦さぬ裁判官として、我々の前に臨み給ふのであります。乃ち天使達は人祖アダム以來の一切の人々を其の御前に集めて、善人は御主の右へ、惡人は其の左へと置くのであります。凡ての人々は、今や其の榮光と力に充ち滿てる耶蘇樣、殊に其の御苦難、御死去を證據立てる處の五つの御傷を眼前と示し給ふ御主の前に聲を呑んで控へざるを得ないのであります。あゝ併し此の時の善人達の喜び、この五つの御傷の故に救靈を得た彼等、御主を愛し敬ふ

爲に種々の困難を凌ぎ、その救世の御贖ひを深く信じて遂に己が靈魂の救かりを得るやうになつた彼等の喜びと云つたら誠に如何ばかりでありませう。處が惡人達は如何か。眞の神を無視し、教會の教を守ることを拒んだ未信者、或は一旦信仰に入りながら而も自己の惡い行爲によつて

耶蘇樣の御苦難、御死去の功德を無駄にして

しまつた信者達、彼等は自分のさうした行爲の何ものであつたかを今や明らかに悟つて、限りなく失望、落膽するに相違ありません。愈々御主耶蘇基督は其の最上なる審判の座に着いて、我々各自の爲に備へられた帳面――其れには人々の此世に於いて行つた善、惡が一々餘す處なく錄されてゐるのですが――をお開きになり、之を萬人の前でお讀み上げになるのであります。あゝ其の時の恥かしさ、惡人達は今更いくら悔んでも、もう及びません。一生涯に行つた惡い業、其の最も祕密にしてゐた思、望みまでも公に發表されるのを彼等は聽く筈であります。不正、不義、僞り、誹りの罪、弱い者を虐めた事、或は窃に

隱してゐた猥らな行ひなどが、悉く衆人の前に現はされるのを見た時の彼等、彼等は一體何とするでせう。此の恐しい檢事の論告を聞く時、彼等は如何な態度をとることができませうか。自分は其んな惡事は決して爲なかつた、などと云つてみた處が仕方ありません。斯んな恐しい裁判を受けるなどと云ふことを少しも知らなかつた、と其んな言譯の聞入れられるものでもありません。却つて、あの時天主樣は早く改心せよと云つて、幾度も聲をかけて下さつた、又、あの時には、あの樣な善いお勸告があつたのに、と昔の事が種々思ひ出されるのであります。而も彼等は正しい生活をするよりも、偶像教の中に暮すことを好み、良心の勸めを斷つて、氣隨、氣儘な罪の生活を續けてゐたので、遂に今日の不幸をみるに至つたのであります。併しもう今となつては致し方ありません。萬事は過ぎ去つてしまつたのであります。

これに引替へて善人達の喜びはどうでせう。彼等の行つた善業――その善い考へ、望みまでも一々人々の前に發表されるのであります。成程現世に於いては隨分苦みました――

改心する時など、未信者から嘲られ、誹られ、又、時には大いなる迫害をも受けたでせうが、而も斷然それらの責め嘲りを耐へ凌いで、よく天主の御招きに從ひ、どんな妨げにも屈せず、最後まで眞の道を離れなかつたのであります。彼等は天主樣の十誡を守り、聖會の掟に從ふ爲には如何な犧牲をも惜みませんでした。奮鬪努力――其處には誠に血の滲むやうな戰ひがあつたのです。嵐のやうな惡魔の誘惑、彼等は幾度か敗れやうとしましたが併し其の都度天主樣の御救助に依縋つて、常に立派な勝利を得て居つたのでありました。彼等の心は

天主樣の爲、その御榮の爲にと云ふ一念で

一ぱいだつたのであります。卽ち天主樣は之に報ひる爲に其の德を人々の前に公表し給ふのであります。無論、其等の善人達も矢張り種々の罪を犯したに相違ありません。時として度々大罪に陷ぢたことも有るでせう。此の時之等の罪も亦同じく人々の前に發表される筈でありますが、併し之は彼等の受くべき榮には少しも關係しないのであります。彼等は

「罪の爲に倒れても又直に起上る方法を知つて居りました。告解に由り、又、完全なる痛悔によつて再び立つことが出來たのであります。憐み深い天主樣は、幾度罪を犯しても常に全き赦しを惜まずに與へ給うたのであります。彼等は天主樣に一旦背いたと致しましても後に受けた處の赦しの御恩を思うて、前よりも一層深く天主樣を愛し奉つるやうになつたのであります。

斯くて此の大いなる日に當つて、聖人達は現世に凌いだ種々の困難――其れは天主樣の爲でもあり、又、己が救靈を得る爲でもありましたが――を顧みるのです。あの時は、あの樣に苦く思つた事、つらく感じたことも實は何でもなかつた、大した事でもなかつた、と思へるのではないでせうか。で、我々は現世に居る間に此の事を考へねばなりません。試みに逢ふ時、病氣に罹る時、或は教の爲に、恥辱、苦難を受ける時、又、惡魔の誘ひにかゝつて、之と大いに戰はねばならぬ時に於て特に然であります。此の考が其の時我々にどれ程の勇氣を與へることか、又、どれ程の勵みとなることか、之は諸君のよく御經驗に

なつてゐる處ではありますまいか。

さて斯うして

萬人の善、惡の發表が終ると

今度は愈々最後の判決が宣言されるのであります。この宣告は既に私審判の時に決められたものと同樣でありますが、たゞ今度は衆人の前で、其の蘇つた人に對して行はれると云ふ違ひがあるのです。其の時耶蘇基督は其の救世の事業に由て儲けられた天國の幸福を御自分と共に樂しむ爲に聖人達をお招きになり、之を後に從へて天國にお入りになる筈であります。「來れ、我父に祝せられたる者よ」と、さう云つて

耶蘇樣が御自ら天國へ案内して下さるので

ありますが、あゝ此の時の彼等の心の歡喜と云つたら果して何物に譬へられませう。處が之に反して惡人等は如何か。「呪はれたる者よ、我を離れて永遠の火に入れ」と、彼等はこの恐しい宣告と共に主の尊前を追拂はれ、惡魔と共に地獄の深淵に投げ込まれねばなりません。あゝ此の時の惡人達の心持ち、思つてみるさへ恐しい事です。（一寸此處に申し添へたいのは、我々が現世に在つて行ふ善、惡は、心でばかり是を行ふのではなく、常に體も共々其れを行つてゐるのであります。ですから其の完全なる賞、罰は、靈、肉が共に受けねばならぬ筈でせう。即ち公審判に於ては是が完全に果されるわけなのであります。）

×

善人は天國を受け、惡人は地獄に投入れられる公審判、之で天主樣の御計畫は一段落を告げ、我々は凡て皆其の落着くべき所に落着いたのであります。人間の罪に因て汚され、涙の世となつてゐた此の地球上も、今は淨められて立派な場所となり、天國の一部――善人の住處ともなる筈であります。最初は其の肉體も不滅なるものとして造られて居つた人間、罪の爲に死の罰を受けねばならなくなつたのでしたが、

公審判後

には再び元通り完全な有樣に造り直されて、我々の上に最初天主樣が御計畫されたことが

此處に全く成就するのであります。

我々は將來、この公審判によつて天國或は地獄のどちらかに入らねばなりません。川の水が凡て海に流れこむものであるやうに、善の流れは天國へ、惡の流れは地獄へ、と知らず知らずのうちに行き着くのであります。卽ち現世に於て我々は自由に此の何れかを選ばねばならぬのですが、幸ひ善の流れの方に棹さすならば、遂に天國と云ふ海に入つて其處に永久に變らぬ天主樣の御慈愛を受くる筈であり、若し惡の流れをとるなら、それこそ大變、永遠の地獄に落ち込まねばならぬのであります。

諸君、我々は公審判の曉、誰か善人と倶に耶蘇基督の右に置かれることを望まぬものがありませうや。其の日萬人は、右か左か、どちらかに選り分けられねばならぬのですが、あゝ、果して我々は何方に置かれるでせう？　是は何人も知ることが出來ません。それは我々の死ぬ時の靈魂の狀態如何によつて定められるのでありますから、今天國にゐる聖人達や地獄に苦んでゐる惡人達の爲には、最早その場所が決められてゐるのでありますが、

併し我々は未だ其の何方とも決められて居らぬのであります。天國か、地獄か、我々は今からでも之を擇ぶことが出來るのであります。あゝ天國！　無論人々は誰しも之を擇ぶに相違ありませんが、併し善い結果を得やうとするには、たゞ微溫い希望を抱いてゐるだけでは迚も足りません。實際によい効果を擧げたいと思へば、何處までも眞面目に一生懸命公敎的生活を送るやうにせねばならぬのであります。我々は眞摯な態度をもつて忠實に死ぬ迄之を守り續けねばなりません。諸君

死んでしまつては、もう遲い

のであります。何卒今生きてゐる間に各自の救靈を確實なものにして置いて戴きたいのであります。屢々、死、審判、天國、地獄と云ふ此の四終の事を思ひ出して下さい。之を默想することは、罪を避け、善を行ふに非常に力となるものでありますから。

第四十五　眞の教會の目標（一）

宗教とは何であるか、一口で云へば、神に對する人間の道で有ると云ふ、卽ち此の意味に於て、宗教は太古、人間が天主様に造られた其の瞬間から存在せざるを得なかつたものであると申さねばなりません。人祖が其の無上至尊なる創造主に對して當然盡さねばならなかつた義務――己が創造主として神を認め、之を愛し、之に奉仕すると云ふ、この

神人の關係

を稱して宗教と申すのであります。ですから耶蘇基督が此世にお出で下されたのは、決して新に宗教を立てるためではなく、たゞ人類を其の人祖が招いた恐しい滅亡の淵から救ひたいと云ふ、その御受難の功德に依て、我々の罪業を贖ひ、天國の遺産を嗣ぐの資格を、元通り取り返へしてやらうと云ふ、其の慈悲深い大御心からしてお出で下すつたのであります。卽ち基督は、人祖が亂した處の宗教を完全に取り繕ふためにお出で下すつたのでありました。そればかりではなく、耶蘇基督は、人間の知らねばならぬ眞理、守らねばならぬ義務、道德を教へ、又、天主様に至るには斯くの如くに生きねばならぬぞ、と躬ら三十三年間の實生活を以て、我々の尊き手本となり給うたのであります。そして最後に、其の御教を誤りなく後世に傳へ、一方では其の御受難の功德を世の終りに至る一切の人々に分ち與へんが爲に、教會と云ふものを立てゝ、之に其の大いなる寶と絶對的な敎權とを御委託になつたのでありました。ですから我々は永遠の滅亡から救はれて、天國の福樂を得たいと望むならば、どうしても此の教會に由らねばなりません。天主様より遣はされ給うた神たる基督に依て立てられた此の教會を除いては、我々を地獄の深淵より救ひ得るものは何もないのであります。

世に澤山有る虛僞の宗教に就いては既に前回詳しく申し述べましたから、こゝに又喋々する必要は有りますまい。要するに其れらは凡て普通の人間の考へた宗教であつて、宗教

の本質的性質として、どうしても其の天啓たる事が必要であるのに、何で人間が勝手に之を立てる權利がありませう。又、常識的に考へても、貧弱な我々の頭腦――神の本性の萬分の一も推知するに足らぬ人間が、如何にして、宗教を立てるために天主様の持つておいでになる處のお考へなり、其のお望みを了知り得ませうや。一體、彼の間違つた宗教の創立者らは、人間の罪業を贖ふ爲に何を致しましたでせうか。で、畢竟、此の人間の立てた宗教は、丁度

印判の押してない契約書

或は僞りの印判の捺してある皇帝の御命令書の如きものであります。斯様な契約書や詔書に對して、其の契約人なり皇帝は何んの關係も有せず、又、被契約人或は人民の方でも其れを履行し、又、遵奉せねばならぬと云ふ義務が何處にもありません。何故かなら、其の書付けは正しくないもの、贋せものだからであります。それに又、天主様が一旦斯うとお定めになつた宗教に對して、我々人間の分際で之に兎や角云ふ權利は聊かも有りません。

例へば或る契約書に、被契約人が勝手な事を附け加へたり、又、或部分を自由に消し去つたりしたならば、其の契約書は、もう全く價値の無いものになつてしまつて、いざと云ふ場合に何んの役にもたちません。如何な裁判所でも斯うした契約書は決して認めないのであります。

宗教は神と人間との間に交された處の一つの契約書――天主様の立派な印判の捺してある契約書の如きものであります。天主様は、若し人が其の宗教の教ふる處を悉く信じ、その命ずる處の掟を凡て堅く守つたならば、其の人には必ず天國の永遠なる福樂を與へるぞと云つて、其の契約書に、ポンとお手許にあつた大きな印判を捺して下すつたのでありました。ですから人たるもの、この天國の永遠なる幸福を得るためには、どうしても其の契約の條件を悉く守らねばならぬのであります。今假に、或人が天主様のお定めになつた處の御教の中から何か一つを除き、又、自分が我儘をするために邪魔になる掟の一部を捨てゝ、其の代りに自分の都合の好い事を加へたりしたならば、もう其れは宗教として何の

値打もありません。假令、眞の宗教の種々の好い部分を尙多く持つてゐるとは云つても、其れは既に

力のない、効能のない宗教

となつてしまつたので有ります。天主様は其んな缺けた宗教をもうお認めになりません。そして其の契約――天國の福樂を與へると云ふ御約束を、お守りにならねばならぬと云ふ義務も無くなつてしまふのであります。ですから、其んな横道に逸れた宗教を、いくら守つてゐたからとて、眞の救靈の門に入ることは、どうしても不可能であると云はねばなりません。

×

さて諸君も御存知のやうに、人間が天主様の手に成つて、彼の樂園に置かれた、既に其の時から、惡魔は現れて、天主様の御業を損はう、――人間を樂園から奪つて、地獄の淵に陷いれやうと、努めたのでありました。否努めたばかりでなく、惡魔は巧く其の野心を

遂げる事ができたのでありました。併し此處に天主様は、その救世の御事業に由り、又、天主公教會をお立てになる事に由て、一旦惡魔によつて亂された處の御計畫を、又新しくお立直しになつたのでありました。けれども惡魔は其れで閉口し、手を引いたかと云ふと決して左様では有りません。彼は依然として其の野望を止めることなく、執拗に附纏つて天主様のお立直しになつた御業を、又々損はふと企んでゐるのであります。惡魔は、已が失つた天國の福樂を、人間に占められるのが口惜しい處からして、人間を眞直に天國に至らせる天主公教會を

目の上の瘤として

先づ之を打毀さうとするのであります。人間の靈魂を墮落せしめて、之を地獄に陷いれるには、眞理の保護者であり、聖寵の寶倉で有る處の教會を亂すに限る處からして、惡魔が一生懸命これを攻擊するのは、當然の事であると申さねばなりません。そして、天主様が此の惡魔の跳梁を或程度までお默許しになつてゐるのは如何なる理由かと言へば、それは

諸君も御存知のやうに、現世は我々人類にとつて試練の世となつてゐるからで有ります。我々信者は此の惡魔、世間、邪慾など〻云ふ敵に對して勇しく戰ひ、其れに打勝つ時、天主様は褒賞として天國の雙び無い福樂をお與へ下さるのであります。世の終り、公審判の濟む時、我々に對する試みの終る日こそ、惡魔は有無を言はさず惡人達と共に地獄に閉ぢ籠められて、もう何んの力もなくなつてしまふと云ふ、所謂る

惡運盡きて

彼等は永遠の苦罰に悶絶え苦しまねばならぬ日が來るのであります。

×

惡魔は人間の弱點を捕へて、巧に之を誘惑しやうと致します。その跳梁を恣まゝにする惡魔の隱然たる勢力の如何に甚大なるかと云ふことに就ては、諸君も既によく御存知で御座いませう。彼は人間を誘惑するに種々の方法を用ひて居りますが、中でも最も成功してゐるのは、眞の宗教によく似た贋の宗教を作つた事であります。一旦眞理を認めた人を、

再び舊の偶像教や迷信に引き戻すやうな、其んな見えすいた不味い方法を避けて、惡魔は夙に人間の傲慢心に附け込んだのでありました。先づ教理に對して種々な疑問を發させるのであります。卽ち傲慢で小賢しい人間を使つて、どうも此の點は今の時代には不向である、此の掟は自分等の國に不適當である、と其んなことを思はせるのであります。その人は、所謂る

改革者と云ふ美名

の下に、その都合の惡い點を除外して、其の代り、勝手な都合のよい事を附加へ、其れで何か非常に正しいことを行つたやうに考へてゐるのであります。言葉を換へて云へば、惡魔は適方から、ぼつ〳〵と眞の教理、掟を曲げるやうにして、終には耶蘇基督のお立てになつた宗教とは全然別物の宗教を立てさせやうと努めるのであります。諸君は屢々人が斯ういふ言葉を吐くのをお聞きになりますでせう。曰く「我々科學者としての立場から、どうも教理の此の點だけは信じられない」と。氣毒な事に彼等は宗教と科學とをごつちやに

してゐるのであります。宗教なるもの、及び信仰なるもの〻本義を辨へず、尤もらしい顔をして、自身まんまと惡魔の計略にかゝつてゐる事を御存知ないのであります。永遠の幕が切つて落される日、眞理の光が燦然として目の邊り輝く時、彼等は今更乍ら己が誤りを知つて吃驚するに違ひありません。――で、彼等は其の信じられない部分を除外したもの自分勝手な考へを附け加へて作つた宗教を眞なりと信じ、他人にも亦之を信じさせやうと奬めるのであります。ギリシア教、然り、ロシヤ教、然り、プロテスタント各種皆然りでありまして、其れ等は眞の宗教の好い部分を多分に殘して居りますので、一見非常に紛はしく、其の名さへ凡て自ら基督教と名乘つて居るのであります。併し篤くと其れ等を考察するならば、其の內容に多くの缺けた點、改められた部分が御座いますから、其れ等は如何しても眞の宗教としての價値を失つたものであると申さねばなりません。

諸君、斯うした混亂の中に在つて、獨り我が天主公教會は、大洋を悠々と航海する大船の樣に、天主樣の御加護に由て、今日まで聊かも傷附けられることなく、潔きもの、全き

ものとして續いてきたのであります。之を覆さう、損はう、と惡魔の攻擊は小止みも有りませんが、併し夫んな事に我天主公教會はびくとも致しません。成程其の嵐の風に、（虫づいた木の果實が微風にも吹落されるやうに）極めて惡い信者だけが吹落されは致しますが、（好い實は全く熟して、主人の取入れの日迄しつかり木に着いてゐるやうに）善い信者は天國に主なる神の御手に由て取込まれる日まで、安全に殘つてゐるのであります。

× × ×

世に有る多くの宗教――曰くギリシヤ教、ロシヤ教の如き離教を始め、キリスト新教の如き異端及び他の數ある種々な宗教の中から、耶蘇樣のお立てになつた唯一眞實なる宗教を見分けるには如何したならばよいか、と云へば、其れには先づ其の眞の宗教のみが持つてゐる處の特徵に由つて之を認めるのが最も容易であります。卽ち

一、聖、公、使徒傳來

と云ふ此の四つの特徴を持つことに山て、天主公教會は、世に獨り我が宗教の唯一眞なる事を表顯してゐるのであります。以下先づ此の四つの特徴の中の最初の「一」であると云ふ事に就いてお話致しませう。卽ち耶蘇基督のお立てになつた眞の教會は、どうしても唯一の頭――耶蘇様が其の御昇天後、御自分に代つて、其の教會、云ひ換へれば凡ての信者を統一すべき者としてお定めになつた處の一人の頭を持つて居らねばなりません。次に眞の教會は唯一の教義、卽ち耶蘇基督、又、其の弟子達が說かれた處の唯一なる教義を、さながらに受け繼いで居らねばなりません。又、眞の教會は耶蘇基督が御制定になつた祕蹟を全部其の儘所持してゐねばならぬのであります。

で、其の一つの眞の教會には、唯一の頭が無ければならぬと云ふ此の事に就いて、もつと詳く申し述べてみませう。諸君、抑々この一つの教會、一つの頭と云ふ事は、誠に分り易い道理と云はねばなりません。若しこの唯一なる頭がなければ、先の唯一なりと云ひ、又、唯一の教會であると云ふ理屈が立たぬのであります。例へば一つの國に二人の皇帝が

出來たならば、其の國を二つに割つて、二つの國を作らねばならぬやうに、宗教上に於ても二人の頭が有れば二つの宗教となり、三人の頭が出來れば三つの宗教に分れねばなりません。處が、耶蘇基督は唯一の宗教、唯一の天主公教會を御立てになり、又、同時に之の頭として彼のペトロ以下に續く代々の教皇を以てされたのでありました。日本では教皇を普通に羅馬法王と呼んで居りますが、此の

法統は連綿として

現教皇――二百六十一代目のピオ十一世聖下まで、少しも切れずに續いて居るのであります。

次に、甲乙の宗教は普通其の教ふる教義の相違に山て區別をつけます。で、逆に此處に若し二つの相異なつた教義が有るとすれば、卽ち二つの變つた宗教が有ると云ふことになるのであります。併し其れは丁度、一つの國に二つの異なつた法律が有ると云ふのと同じであつて、其れはどうも不合理な事であると申さねばなりません。而るに我が天主公教會

は、萬國、萬代を通じ、たゞ一つの教義によつて一貫してゐるのであります。アジヤ、アフリカ、アメリカ、ヨーロツパの何れの國へ行つても、信者は皆日本のカトリツク信徒と凡て同じ教義を學び、同じ祭式に與り、同じ祕蹟を受けてゐるので有ります。そして其れ等は凡て耶蘇基督、又、其の御弟子達の教へ、行つたことを、その儘受け繼いで居りますから、誠に此の宗教、我カトリツクのみ獨り神なる基督御自身から傳へられたものであると申さねばなりません。

尙一寸申し添へ度いのは、教皇聖下が時々一つの信仰箇條を定めて、之を一般の信者に公にされることが有ると云ふ事に就いてゞ御座います。併し是は決して教皇が新しい一つの教義を作つて發布されたのではなく、たゞ使徒達から確に教へられてゐた處の教義を新に發表されたに止まるので有ります。卽ち教義上などに何かの疑問が起つた場合、教皇は之に一つの判決――之は斯く信ずべく解釋すべきものである、と云ふ斷定を下して公に發表されるのでありますが、此の時教皇に由て定められた事は、もう疑ふことの出來ない

信仰箇條として我々は信ぜねばなりません。何故なら其れは

教皇の不可謬權

と云つて、耶蘇基督の御約束されたやうに、教皇は格別なる天主の加護に依り、さうした場合に常に正確な判斷を下されるからであります。

クレード

第四十六　眞の教會の目標（二）

諸君は世間に所謂る基督教と自稱する幾つかの宗教の有るのを御存知で御座いませう。即ち彼等は皆各自是が眞の基督教であると堅く主張するのであります。甲論乙駁、我々は何れが正しい基督教で有るかを見分けやうとする時、全く迷はざるを得ません。

併し一つの明白な事實は、耶蘇基督は御一人であつたと云ふことです。で、若し彼等各自の主張が正しいとするならば、基督は天主公教以下いくたの相異なつた教理を有する教會をお立てになつたと云ふことになりませう。併し其れは有り得べからざる事であると云はねばなりません。何故ならば、耶蘇様は決して其んなに多様の教理を作つて、信徒間に徒なる論爭

不和の種

を蒔くやうなことを爲されやう筈がないからであります。實際また常識的に考へても眞の宗教は一つでなければなりません。基督が御一人で有つたやうに其のお立てになつた宗教も一つ、教會も一つ、教理も亦一つでなければならぬのであります。

諸君は今日世に行はれてゐるカトリック以外の自稱基督教、即ちプロテスタント教（新教）諸派が、何時の時代に起つたもので有るかと云ふ事に就いて御考へになつたことが御座いますか。彼等は凡て今から約四百年前、即ち基督御在世當時から約千五百年後に出來たものであります。西暦一千五百年以降に簇出したものにすぎません。乃ち問題は斯う云ふことになるのであります。神なる基督、何物も誤ることの出來ぬ御方が、其のお立てになつた宗教に就て、一千五百年も經つてから「どうも之は不完全である、此の點を改め、此の點を棄て、又、斯う云ふことを附加へねばならぬ。そして此の教理の解釋と云ふ事は汝等人間の自由に任すから、各々勝手に解くがいゝ」と仰せられた、と、まあ、斯様な事になるのであります。言葉を換へて申すなら、基督は一千五百年も經つてから、漸く自分

の教の誤謬であつた事、缺けて居つたと云ふことに氣附かれて其れを發表し、其の間違つた點を改訂する爲に、新教の所謂る元祖なる某と云ふ人を遣はさねばならぬと思召されたのでありませうか。諸君、何とお考へになります？……

天主様は全智なる御方でありますから、現在の事も將來の事も、何も彼も知らぬと云ふ事が御座いません。天主様は先々の事をちやんと見透して、そしてお作りになつた宗教でありますから、之は世の終り迄其の儘續くべきもの――途中で不足とか不滿な點の出來やう筈のないものであると云はねばならぬのであります。正しい判斷力と、愼重な思慮とを持つた人であるならば、何で此の明々白々な眞理を疑ひませうや？。で、假令其れが時代順應と云ひ、個性尊重等と云ふ、其の他の美名の下に行はれた改革であつても、天主の權威ある教や其の御掟を勝手に取捨するが如きは、要するに其の人の傲慢心より出た憎むべき行爲であると申さねばなりません。

此處に彼の新教を起した處のルーテルに就いて考へてみたいと思ひます。卽ち彼は最初

カトリツクの司祭でした。凡ての司祭のやうに彼も亦天主様に對して

生涯不犯の誓ひ

を立てた人であります。然るに彼は此の誓ひを破つて結婚致しました。又、彼は司祭として教皇聖下に萬事從ふべき筈であつたのに、傲慢なる彼は之に謀叛を企てゝ、遂に全く自分勝手な一つの宗教を作り、まんまと其の頭と成りすましてしまつたのであります。彼は神聖犯すべからざる教權を亂して、多くの信者を迷ひの道に陷いれてしまつたのでありました。今日世界を風靡する惡思想――あらゆる主權を無視して我儘勝手を振舞はふとする誤つた所謂る

自由主義

の最大原因は、實に此のルーテルに其の端を發したものであると申さねばなりません。

×

さて、前回の終りの方で、眞の教會が有さねばならぬ四つの特徵、卽ち其の一なる事、

聖、公、使徒傳來と云ふ中の最初の「一」と云ふ事に就いて申し述べましたから、今度は續いて其の聖であらねばならぬ事に就いてお話致しませう。

この「聖」と云ふのは、聖人の聖の字を書くのでありまして、之は卽ち完全である、尊いものであるとの意であります。何故眞の宗教が聖でなければならぬか。之は宗教そのものゝ性質から考へて、當然しかるべき事だと云はねばなりません。抑々眞の宗教は人間の救靈と云ふ一つの大きな目的を持つて居ります。我々が靈魂の救かりを全うする爲には、どうしても惡を避け善を行つて聖なるものとならねばなりません。卽ち耶蘇基督のお立てになつた宗教は、我々を聖ならしむる處の種々な方法、神なる基督の御制定になつた處の立派な祕蹟を持つてゐるのであります。之を有さぬ處の他の教會が、何で聖なる實を結ぶ事ができませうや。聖ならぬ處の教會が、諸君、何で聖なる實を結ぶ事が出來ませうや。無論カトリック教會の中にも極く少數の惡い信者が居ります。今も昔もさうですが、是は又、將來に於ても致し方のない問題であると云はねばなりません。丁度、其れは最も良い

畑にも尙ほ若干の雜草が芽を出すのと同樣であります。で、此の少數を除く他のものは皆忠實に天主樣に仕へ、日々益々聖ならんことを努めて居ります。そして此の信者等の中には、諸君も御存知のやうに、何時の時代にも多くの聖人が出るのであります。彼等は

人の性に超えた勇氣と忍耐

とを以て、如何に勝れた多くの善業を行つたことか。我々は聖人傳などに由て、凡有ゆる苦難に對して、最後まで立派に其の信仰を守り續けた處の勇ましい致命人や殉教者の話を屢々讀んで居ります。彼等の行つた業は、迚も人間の弱い力で出來ることではなかつた。それには必ず神が力を貸して居られるに違ひない、そうでなければ、如何してあんな事が行ひ得ようや、と、是は萬人の等しく認めてゐる處であります。そして注意すべき事は、其の感ずべき信者は大低皆、眞の宗教なる我カトリックに屬するものであつたと云ふ此の一事、言葉を換へて云ふならば、天主樣は、さうした大いなる力を、たゞ眞の宗教の信者にのみ賜はつたのでありました。

眞の宗教の聖なる事を裏書する立派な證據として、我々は奇蹟を擧げねばなりません。奇蹟に就いては先に詳く申し述べましたから、此處では何も申しませんが、要するに之は天主樣が、その宗教の眞實なる事を一般人に確認させる爲に時々お用ひになる處の手段である、凡て其れは初め天主樣がお定めになつた所謂る自然の法則に逆らふものであつて、どうしても是には此の法則の上にある神の意志、力が働かねばならぬ、神の全能、然り、神の全能にして始めて爲し得る仕事なのであります。處で我カトリックを見ますと、常に此の種の奇蹟が絶えません。何時の時代にも大小幾つかの奇蹟を以て飾られて居ります。ルードの出來事など未だ諸君の耳新しい處でありませう。

次に眞の宗教は「公」でなければなりません。公とは公教會の公であります。公と云ふ之は卽ち世界的のものでなければならぬとの意であります。基督は其の御昇天の直前、使徒達を召して仰せられるに「汝等萬國へ行きて萬民に我が教を宣べよ」と。現今に於ける世界の趨勢をみますと、卽ち此の基督の御言葉が漸く實行されやうとして居ります。世界

の果々まで、今やわが天主公教は殘す所なく擴がつてきました。何處の國でも、最初此の天主公教が入りかけますと、必ず有形無形種々な故障、迫害が起つて之を排斥致さうとします。至る所に

流血の慘事が繰返へされた

ので有りました。けれども我天主公教は、如何な困難にも決して凹みません。人や惡魔が如何程其れに反對しても、此方は天主樣御自身が行ひ給ふ所の業であります。決して何物にも妨げられるものではありません。わが天主公教は既に一千九百年以上の歷史を有して居ります。基督の御約束に「自分は世の終りまで自分の教會と共に居る」と有りますが、之は我天主公教が世の終りまで益々榮えると云ふ事の立派な保證であると云はねばなりません。尙終りに一寸新教の方のことを考へてみませう。ギリシヤ教にしろロシヤ教にしろ又、各種の新教にしろ、凡て其の實際の有樣が之を公と云ふことを許さぬのであります。彼等は各々世界の局部にしか信者を有しません。それに獨逸や英國の新教になりますと、

クレド

その名さへ之を英國國教、獨逸國教と云つて其の

教を國で隠つてゐる

のであります。諸君、要するにカトリック以外の宗教は決して公と云ふことが出來ない、世界的であることが出來ぬのであります。

さて、今度は耶蘇基督がお立てになつた宗教であると云ふからには、どうしても其の當時基督が御制定になつた教義、掟、祕蹟などの一切を、さながらに繼承して居らねばならぬと云ふ、即ち其の使徒傳來の宗教でなければならぬと云ふ事に就いてお話したいと思ひます。誠に眞の基督教と云ふ者を拵つたためには、たゞ其の宗教に似たものである、と云ふ丈けでは足りません。實際、眞實に基督及び使徒達の教へた宗教……其の儘の宗教……一點の相違もない宗教……途中に於て何等變ることなく、今日まで傳つてきた處の宗教でなければなりません。

抑々天主公教は、頭として耶蘇基督のお定めになつた處のローマ教皇聖下に從ふ司教、

司祭、信者の團體を指すのであります。若し一時の間、教皇、司祭、又、信者の一人も無い時が有つたと假定するならば、其の時は基督のお立てになつた教會が全く消えて永久に無くなつてしまつた時であると申さねばなりません。後で之によく似た教會を誰かゞ立てたとしても、其れは最早、耶蘇基督と使徒達が立てた所謂る

使徒傳來の教會

とは言はれぬのであります。何故ならば、丁度其れは一時血統の絶えた家を、どうも彼の家名を絶やすのが惜しいからと云つて、何人かゞ其の家を新たに嗣いだやうなものであります。それ故、假令前と同じ名前、地位、財産を持つてゐても既に血統が變つて居りますから、もう其れは本當の前の家の續きであると云ふ事が出來ないと云ふ、先づ斯うした例に等しいのであります。

天主公教の頭たる教皇は、基督が直接お定めになつた處の第一代目の聖ペトロから、今まで眞直ぐに少しも切れずに續いて參りました。司教や司祭の位も矢張り品級の祕蹟によ

つて眞直ぐに使徒等から續いてきてゐるのであります。現在の信者の團體は、昔日使徒達が作つた信者の團體の續きであつて、之が今迄切れずに段々殖えながら擴がつてきたのでありました。今日の天主公教會は、丁度使徒達が植ゑた處の木の樣なものであつて、此の木は世紀毎に多くの枝を生じ、澤山の新しい果實を結び、遂に其の枝は茂りに茂つて、實に全世界を覆ふやうになつたのであります。諸君方が信者にお成りになつたと云ふのは、つまり天主公教會と云ふ團體の人數を殖えさせた事でありまして、今後諸君の子孫は次第に其の數を增しながら、教會を何時迄も續かせるやうにする筈であります。

×

以上、簡單ながら一、聖、公、使徒傳來と云ふ四つの徽號に就いて申し上げましたが、諸君は之に由て他に基督教と唱へてゐる宗教の中には、此の四つの徽號を有さぬと云ふことが漸次お分りかと思ひます。假令此の中の一つか、二つを持つてゐるとしても、其れでは駄目なのです。基督のお立てになつた眞の宗教と云ふからには、此の四つの徽號が全部

揃つて居らねばなりません。誠に此の四つは何時の時代に於ても必ず持つて居らねばならぬ處の徽號であります。

諸君、試みに日本に於ける新教に就いて調べて御覽なさい。其れらが一つの頭――其の凡ての派を總括する處の一つの頭を有してゐないと云ふ事は明白な事實であります。又、其の教ふる處も全く一定して居りません。新教の方では各人が勝手に聖書を自由に解釋して、自分の思ふ通りを信じ、其の人

獨特な信仰

を形造つてもよいと云ふ事になつて居るのです。ですから聖書の中に自分の氣に入らぬ點が有るならば、其れを信じなくてもかまひません。所謂る自由主義と云ふ奴であります。自然此の新教は國々に由て分れ、又、一國の中にも種々な派に分れるやうになり、一つの派の中でも其の信者の各々によつて、其の信ずる處が異なると云ふ、即ち新教は終に一人一黨になつてしまふと云つても決して極言ではありません。

新教には又、聖と云ふ徽號を見ることが出來ません。勝れた聖人も無ければ、又、本當の致命人をも有しません。其の教へを證明する爲の奇蹟をも亦有さぬのであります。

公と云ふ徽號に就いても同樣であります。新教は其の創立以來二三百年の間は、ほんの一二三ケ國に擴がつてゐたに過ぎません。近年漸くあちらこちらに宣傳されるやうになつてきましたが、併し其の各派が皆一致を缺いて居りますから、實際に於いて本當の公であるとは言はれないのであります。

新教は又使徒傳來と云ふ徽號を持つて居りません。先に申し上げたやうに新教は今から約四百年前に始つた處のものであり、其の創立者は誰かと云へば、カトリックを回避し、逃亡した處の

我儘な一司祭ルーテル

であります。彼が、基督が其の教を確立されてより千五百年後に、我カトリックを棄てゝ新教なるものを起したと云ふ此の事を考へるならば、一目して其れが使徒傳來のものではなく全く人間の作つた間違つた宗教、無益な宗教であると云ふ事が分明る筈であります。

さて、一寸此處に申し添へたいのは、此の宗教の眞僞を識別する爲の徽號が有ると云ふ事を聽いて「自分は毎日迚も忙しくて其んな事を入念に調べてゐる暇がない」と云ふ人があるかも知れませんが、併し其んな人は別に心配する必要がありません。

我々の心に安心を得る爲には

何も必ず此の四つの徽號を調べねばならぬときまつた事ではないのであります。天主樣が此の四つの徽號をお付けになつたと云ふ理由は、たゞ學者等に對して之を確認せしむる爲の便りとされたまでに過ぎません。併し學者と云ふものは、大概、學問が有ればある程傲慢に陷り易いものであつて、どうかすると分り切つてゐる眞理とか、又、神の惠みなどをさへ頑として受け入れぬ場合がよくあるのであります。

で、學問のない人や、暇のない人は、此の四つの徽號に由らずとも、他に一つの立派な印が御座います、何かと云へば、其れは此の宗教――此の眞の宗教に依て、心に限りない

安心を感ずると云ふ此の一事であります。偶像教や誤りの宗教の中には確な安心が得られない……何も彼も漠然として心は甚だ不安であり、何か徹底しない疑念が常に頭の一隅に蟠つてゐるのです。誤つた基督教に就いても之は同様で、心の本當の喜悦、安心を得ることが出來ません。これは如何なる次第かと云へば、眞の神が、さうした宗教の中にはお住ひにならぬからであります。神の居まさぬ所に、何で眞の平和がありませう。

一體此の心の平和と云ふものは、身體の健康なるのと同様であつて、健康者が自分自身の健康に餘り頓着せぬやうに、わがカトリック信者も心に大いなる安心を持ちながら、自分で其の事に就いて餘り氣が付かぬのであります。丁度其れは裕福な家の子供が、少しも貧乏な不自由な目を知らずに大きくなつてきた處から、一向自分の幸福な境遇を有難いとも思はず、それが普通の事であると考へて、別に氣にかけないのと同じであります。併し新しい信者、偶像教から歸正つて間のない信者になりますと、丁度、長い間の病氣が平癒した時のやうな心持ちを以て、心に大きな平安を感じて居るのであります。何人でも愈々

眞の神の許に歸正り度いと決心した時には、假令洗禮を受ける前であつても、既に心の中に何か變つた事があつたと云ふことが分つて居りますから、心には今迄嘗て味はつた事のない愉快、安心、喜悦を感ずるのであります。此の確信に依て、普通の信者でも、學問のない弱い女子供でも、信仰を棄てるよりも苦しみを受ける、或は生命を棄てた方が勝しであるとして、之を擇んだものが澤山有つたのであります。此の心に眞の安心が得られると云ふ印……此の印さへあれば、他の印は無くともよいのであります。處が諸君、此の印を有してゐるのは獨り我カトツリクだけであります。

諸君が多くの人々の中から特に選ばれて、眞の宗教に入ることの出來たのは、天主様の深い御恩惠によるのであると云ふことを悟らねばなりません。洗禮をお受けになつた時、諸君は惡魔と其の業、卽ち凡ての迷信をお棄てになつたのでありますから、何卒今後は此の眞の教に誤りを混ぜぬやう――勝手に其の教を枉げぬやうに注意して下さい。我々は、天主様が御啓示し下すつた事を其の儘信ぜねばなりません。其れは世に

クレド

唯一眞なる教

であり、又、絶對なる掟だからであります。又、我が宗教中の習慣――朝夕の祈禱とか、大齋、小齋を守る事、又、日曜にはミサを必ず拜聽することなどを怠つてはなりません。畢竟、諸君が一人も殘らず、よい信者、完全なる信者となつて戴きたいのであります。どうか日々天主樣に仕へながら、遂には立派なその救靈を得るやうに努めて下さい。

クレド終

昭和五年一月五日印刷
昭和五年一月十日出版
昭和八年三月廿五日再版

定價 金五十錢

著者兼發行者　ペトロ・マルモニエ
印刷者　亀田文治
印刷所　大分市上紺屋町　ドン・ボスコ印刷學館

不許複製

發行所　大阪府北河内郡友呂岐村香里　カトリック教會
取次販賣所　東京市麹町區下六番町三十八番地　カトリック中央出版部
振替東京八一五五八番

終